

憑依沖田さんの行く！イナズマイレブン1・2・3！！

音佳叡里

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日FGOの福袋を買うために、プリペイドカードを持ってコンビニから出てきたところを、上から降ってきた鉄骨に潰されて死んでしまった主人公。

主人公は彼の推しである沖田さんに憑依し、このイナイレ（無印）を駆け抜けてゆく！（予定）

※行き当たりばったりなストーリーなので、途中でエタる可能性も微レ存？

目

次

プロローグ

選択

雷門ルート

サツカーやろうぜ！

帝国が来た！

帝国が来た！ 02

22 15 9 4 1

プロローグ

「いやー、福袋楽しみだなー」

そんな独り言と共に、プリペイドカードを手にコンビニを出てきたこの男は、この小説の主人公である（名前は特になし。というか考えてない）。

「ようやく推しの沖田さんをお迎えできるのかー。魔人さん（沖田オルタ）の方もすこんだけど、やっぱ本家には勝てねえわ（凛ルートの士郎から目を逸らしつつ）」

などと頭の悪い事をボヤきながら歩いていると、頭上から鉄骨が降ってきて

(あれ……? 何処だこ……?)

主人公は知らない場所で目を覚ます。

場所では無い。

「ようやく起きましたか、（主人公の名前）。ここは転生の間。早速で悪いのですが、貴方にはあなたのいた世界ではない、別の世界へと転生してもらうことになりました」

と言つてきた。男はとりあえず、

(はえー、喋れないしこれはもう信じるしかないね)

は、と首元をいぢり、仕事もこゝにいじり、やがて三ヶ月の間の女

「ええ……（困惑）」「…」
「…」「…」「…」「…」「…」

と困惑している。

(まーしゃーないしゃーない。少なくとも俺は信じるぞい。あ、でも
あの後ガチャを引いた場合の結果だけ教えて)

きながら、

「分かりました。めぼしい物としては沖田総司とカレイドスコープですかね」

（うおおおお!!! 神引きやんけ!!!）

「アツ、ソウデスネ」

少し引き気味な女であつた。

少し時間を置いて、主人公は、

（んで、俺はどこの世界に転生すんの?）

「ええ、神聖なる儀式^{ガチャ}の結果、貴方には『イナズマイレブン（無印）』の世界に転生してもらうことになりました」

（おおう、メタイルビが見えたぞ……）

少し失礼な主人公の考えが聞こえたのか、女は少しムツとした顔になりながら、

「そんなことはありません」

（いやでも）

「そんなどことはありません」

（アツハイ）

この返事には女もにつこう。

「それでは、転生の特典を決めてもらいたいと思います。何がいいですか？」

（じゃあここは……Fateシリーズの沖田総司の容姿と身体能力で！）

主人公の答えは限界オタクのような回答であつたが、女は慣れているのか気にする素振りも見せず、

「かしこまりました。それだけで良いのですか？」

（もち！ 推しになれるんだからこれ以上のことは無いだろ!!!）

「なるほど、あなたの願いは届けられました。良い転生ライフを——」

そんな女の言葉と共に、主人公は意識を闇にへと落として行つた。主人公は聞いていなかつたが、こんな余分な言葉を添えて

「あつやば孤児スタートにしちやつた…………ヨシ！ （現場猫）」

目の前に、純粹な目でこちらを見つめる赤い髪のショタがいる。

「僕、基山ヒロト！　君の名前は？」

「あっ……私の名前は沖田総司です。よろしくお願ひします……？」

「そーじ……？　かつこいい名前だね！　よろしくね、そーじちゃん！」

そんなやり取りをしている中、主人公こと我らが沖田さんは思っていた。

(いや口調が変わるのは良いとして、お日様園スタートなのかよおおおおおおおお!!!)

選択

「僕、基山ヒロト！ よろしくね！」

—— どうして……（現場猫）

でも、いつまでも呆けている訳には行かないでの、無難に挨拶を返しながら思考を続ける。

（ああーまじかー……お日様園スタート来ちゃつたかー……いやでも今からでもワンちゃん逃げられるかも……？　ただ作中だと吉良財閥ってかなり権力あるしなー……どうしようつかなー……）

「…………やろ！　ね！」

「えつ？　あつ、はい……」

「じゃあこつちね！ 着いてきて！」

と、思考に脳のリソースをほぼ費やしていたから私はヒロト君の言つたことは分からなかつた。
沖田さん

（やつべー……何言つてたんだろ……？　ま、どーセ挨拶とか顔合わせとかでしょ。一般的に考えて）

なんて呑氣にも私はそう考えていたが、もうこゝはイナズマイレブンの世界。

『見ない顔だな？　君、名前は？』

という当たり障りのない（前世では）という会話よりも、

『見ない顔だな？　君も一緒にサツカーやろうぜ！』

という頭サツカーな脳筋の会話の方が普及してしまつている。私は悲しい。（ポロロン）

そんなこんなで私が連れてこられたのはサツカーコート。

そう、サツカーコートである。（大事なことなので2回言いました）

「えつとー……ヒロト君……？　一体ここで何を……？」

私の至極真つ当な間に、ヒロト君は理解出来ないというような顔をして、

「……？　何するのつて、サツカーでしょ？」

と頭サツカーな答えを返してきた。

（ああ、そうだよね分かつてましたよ！　ここイナイレの世界だもんね！　そうなるよねなつちやうよね!!　いいよわかつたよやつてやるよ！　必殺技でもなんでもかかつてこいや！）

ヒロトは、百面相をしている私を見て、少し引いていたが、私に「分かりました！　サッカーやりましょう！」

と言われるとその顔は満面の笑みに変わり、

「うん、やろ！」

私がお日様園に来て8年程が経った。

私は中学二年生になり、他の子達——例えばヒロト君やリュウジ君、治君など——は中学一年生になり、とうとう原作開始1年前、ハイソルジャー計画の開始の時期を迎えた。

この世界線の F_{フットボールフロンティア} F_{フットボールフロンティア} は、何の因果かご都合主義か、女子選手も出られるようになつており、ゲーム内で見かけた何人かのキャラもF_{フットボールフロンティア} F_{フットボールフロンティア} で活躍を見せていた。

ちなみに、このルールが制定されたのは5年前だそうだ。いやー誰のせいなんだろなー沖田さんわかんないなー（棒読み）

と、どうでもいい事で話が逸れてしまつたが、南雲晴矢_{バノヒデヤ}、涼野風介_{ガゼル}、基山ヒロト_{ラム}、そして私の4人は、ただいま《お父さん》に呼ばれて園長室へと向かっている。

私たちの言うお父さんは、このお日様園の園長で、吉良財閥のトップである、吉良星二郎さんである。とても温厚そうな人で、こちらに来る度に皆の遊び相手になつて頂いている。私？　お姉さんポジですよもちろん。精神年齢が違くて一人だけ馴染めなくて瞳子さん（吉良星二郎の実の娘さん）と同じようになつてしまつたとも言う。まあこんな私でもちゃんと皆慕つてくれるのでいい子なんですが。

いい子なんですが！　（大事なことなので（r y

いい子なんですが!!　（大事なことなので（r y

おつと、誤解しないで欲しいのだが、私はロリコンショタコンの類

いでは無い。あの子供たちに純新無垢な笑顔を向けられてしまうと、鼻から愛が溢れ出てしまつたりするだけだ。決して彼らを性的な目では見ていないし、見ていたら今頃はこの小説にR18タグがつけられていることだろう。

そんなくだらないことを考えていると（実際は外見だけ見ると、目を閉じて瞑想しながら歩いているように見える不思議。なお実際は当時の子供たちのことを思い出してしまい、鼻から愛が溢れるのを我慢していただけである）、お父さんの待つている園長室に辿り着いた。ヒロト君がドアを開けると、椅子に座っているお父さんが、挨拶もそこそこに、手に持っていた4枚の資料をそれぞれ1枚ずつ私たちに手渡していく。

そこには、『ハイソルジャー計画』と題された、まるで論文かのような内容が書いてある。

「父さん……これは……？」

と、困惑した様子でお父さんに聞いている。そのお父さんは、さも当然かのように、

「ハイソルジャー計画ですよ、ヒロト。宇宙からやつてきた強化石である、エイリアン石を用いて強化人間を作り、この国を私のものにするのです」

と、とんでもないことを話し出した。

「「なつ……」」

これには、さすがの3人も言葉を失つてしまつている。

「この計画では、セカンドランクの1チーム、ファーストランクの1チーム、そして最高級の子供たちで固められた、マスターランクの3チームを使います。あなた達にはマスターランクのチームのキャプテンを務めてもらいたいのです」

マスターチームのキャプテン……だが、ここには4人いる。これはどう言つたことなのかと私が聞くよりも先に、いち早く立ち直つた風助君が、

「ですが父さん、ここには4人居ます。チームのキャプテンで3人が

決まつたとしても、残りの1人はどうなるのですか？」

と疑問を口にした。

お父さんは、その質問を待つていたと言わんばかりに、姿勢を正して、こちらに向直つて力強く聞いてきた。

「そこで総司に質問です。

あなたは、この計画に参加したいですか？

もちろん、断つても構いません。あなたはお日様園の中で1番判断力があり、そして賢い。子供の頃から、あなたと話しているとまるで大学の教授と話しているような感覚に陥ることがしばありました。また、この中で1番サッカーが上手いということもあります。そのことを踏まえた上で、もう一度聞きます。…あなたはどうしたいですか？」

驚いた。私は大学の教授などしたことがないので、大学のくくはお世辞だろうが、それを抜きにしても私の精神年齢の高さについて触れ、さらにそれを利用して私をお父さんの右腕にしたいと、スカウトしているのだ。しかも、そのことについて突つかかつて来そうな睛也君も、珍しく何も言つてこない。

私は、お父さんからのスカウトについて、考え込む。

確かに、これは喜ばしいことだ。だが、一サッカープレイヤーとして、このようなことにサッカーを使うなど許せないと、心のどこかで叫ぶ声が聞こえる。

やつてしまえ、という心の声と、それをしたら戻れない、という心の声がせめぎ合つて、プレッシャーに押し潰されそうで、上手く言葉が纏まらない。

お父さんとヒロト君が何か言つている。

なんだろう、私の耳はその言葉を捉えてくれない。

お父さんが私に手を差し出してきた。

でも、最後の言葉は、私の耳に届いてくれた。

「私の夢のために…一緒に来てれますか？」

私俺
は、

その手を

雷門ルート

サツカーやろうぜ！

「私の夢のために……一緒に来てくれますか？」

そういうて、お父さんが私に手を差し出してくる。でも、こんなことは許されない。

「ごめんなさい……私にはそんなことはできません。私の……いえ、私たちの大好きなサツカーを汚すのならば……その野望、この手で打ち砕いて見せます!!!」

そう私が啖呵を切つて見せると、お父さんは悲しげな表情に変わり、
「そうですか……残念です、あなたならばわかつてくれると思つてい
ましたが……」

「いいえ。確かに、私はお父さんことを理解し、一緒に歩んでいこう
と思いました。でも、こんなことは間違つている。世界中で愛されて
いるサツカーは、そんな野望のために使うものではないんです」

そうだ。原作でもあつたが、この人の願いは、元はといえば間違つ
たものじやなかつたんだ。でも、エイリアンのせいで人格がゆがんで
しまい、こんな計画を立てるようになつてしまつたんだ。そして、お
父さんが私に、とてもつらそうに命令する。

「…………出て行きなさい。家とお金は用意してあります。もう
二度と、私の前に姿を見せるな」

「父さん!？」

脈絡もなく、意味の分からぬ父親の命令に驚き、思わず声を上げ
るヒロト君。確かに、第三者からしたら意味の分からぬものかもし
れない。でも、私にはわかる。

私の計画を、あなたが止めてくれることを願っています。
あの人は託してくれた、あんの心負の心に負けないで、と――！

「……分かりました。…………さ）ようなら、そしてごめん」
「総司……っ！」

「ごめんヒロト君、そしてありがとう。

そしてその日、運命に出会った。

そんなこんなでとある工口ゲつぽい一文をはさみながらも、私が勘当（仮）されてから一週間。ようやくやつてきました雷門町!!!

いやー、かなり面倒だつたなー、この旅。一応瞳子姉さんと同じ拠点を使わせてもらつてる（本人は打倒お父さんのメンバーを探しに行つているため、なかなかないない）けど……

「よお、姉ちゃん。俺たちとイイ事しない？」

「一応言つとくけど……断つたらどうなるか分かつてるよな？」

えー、ただいま例の円堂守と豪炎寺修也を引き合させたと話題の（なつてない）ヤンキー二人組に絡まれております。これマジ？ 家から出て十分でこれやぞ……（困惑）今時こんな誘い方する人なんて見たこともないぞ……ここはやんわりとお引き取りしてもらわねば……そうと決まれば早速……

「あん……」

「おい！ やめろよお前ら！ その子が怖がつてるだろ！」

無表情です（即答）

「ハア？ お前、目腐つてんのか？ どつからどーみても嬉しがつてるだろ？」

「流石つす！ 兄貴！」

無表情です（断固拒否）

「と、とにかく、やめてあげろよ！」

「部外者は引つ込んでろ！！」

「そーだそーだ！！」

なんか勝手に割り込んできた挙句、勝手に私のことを助けようとする

る教祖様、もとい円堂守。ジャージ姿だね……部活終わりかな？　いい加減、被害者の私が介入しないと終わらなさそうなので、助けに入つてあげようと思う（謎の上から目線）。

「あのー……」

「少しだけ……お兄ちゃんを許してくれないか、夕香……」

なんなの!?　さつきからエンカウンタ率何なのアイツら!?
あの女のせいいか？　そうなのかつ!?
第一話参照

そう私が心中で嘆いていると、背後からものすごいスピードで飛んでくる炎。そのボールは、チンピラ（大）の顔に当たり、ボールをけつた人の元へと戻つてゆく。

「…………なつ、なんだお前!?」

呆然とした様子のチンピラ（小）が、ハツと我に返つてそう叫ぶ。ボールを足で止めている、ツンツン髪豪 炎 寺 修也の少年は、チンピラ（小）を鋭い目つきで一睨みする。するとチンピラ（小）は、

「お、覚えてろー！」

とこれまで今時使わないようで使い古されたテンプレを吐き捨て、大きいほうを抱えて逃げ去つていった。

「あ、ありがとう……」

とぼうぜんとした様子でつぶやく私に、クールなツンツン少年は、
「…………いや、無事なら良かつた」

とだけつぶやくと、足元のボールを回収してこの場を去ろうとする。すると円堂君は、

「待つてくれ！　君もサッカーかるのか？　ならさ、聞いてくれよ！

今度、帝国学園とサッカーするんだ！　だからさ、サッカー部に入つてくれないか？」

と、先ほどまでとは一転して、目をキラキラとさせて勧誘に励んでいる。しかし、豪炎寺君のほうは苦虫を噛み潰したような顔になると、小さく一言、

「……俺はもう、サッカーはやめたんだ」

とだけつぶやき、去つていった。これはナイスタイミング。力モがネギをしようつてやつてきたかのようだ。私は、ダメだったか……と肩

を落としている円堂君に近づき、声をかける。

「ねえ……あなた、雷門中ですよね？」

「えつ？ ……うん、そうだけど？」

声をかけられるのが意外だとでもいうような顔をしている円堂君に、私は提案する。

「私も明日からそつちに転校するんです。それはそうと、さつきのこのお礼……と言つたらなんですが、その練習試合の話、詳しく聞かせてください。これでも私、サッカー選手なので！」

「つてことは……」

「ええ！ サッカー部に入れさせてください、ということです！」

「ええええっ！ 本当に!? ありがとう！ すごくうれしいよ！」

そういうと、私の手を取つて上下に激しく振り回す円堂君。めっちゃ痛いんですけど……

「ど、取り合えず自己紹介でもしどきませんか!? あと離してください（切実）」

「あ、そつか。悪い……」

そういうと、私の手を離し、ばつが悪そうに笑う円堂君。そしていつたん場を仕切り直してから、自己紹介に移る。

「俺、円堂守！ ポジションはGKだ！ よろしくな！ えつと……」

「沖田、沖田総司です。ポジションはFWです。こちらこそよろしくお願ひしますね、円堂君」

「おうっ！ よろしくな、沖田！」

彼はニッカリ、そういう擬音が似合いそうなほど笑つて、私と握手する。私が何か言おうと口を開きかけると……

「それでですね……」

「円堂くん？ どこにいるのー？」

あ、あ、つ、！、！、！、（鳴き声）

「あつ……秋のこと忘れてた……悪い沖田、また明日な！」

「ええ、また明日……」

円堂君が走り去つていってから、私はしみじみと思う。

—— ああ、嵐のような奴だったな……、と。

どこからか、『お前が言うな』という声も、聞こえた気がした。

一日明けて次の日、俺は雷門中の職員室に来ていた。

「あなたの他に、もう一人転校生が来ますが、仲良くしてあげてくださいね」

そんな台詞を、くたびれたスーツを雑に着込んで、いかにも『面倒くさい』という顔で話しているのは、FF編ではおなじみ、冬海先生だ。

「着きました。もう一人はすでに中で待っています。あなたも早く入ってください」

と告げられ、顔を上げてみると、俺たちはいつの間にか教室の扉の前に立っていた。流石に同じクラスに一人も転校生はいないだろ：そう思いながら、渋々教室の中に入していくと、（一方的に）見知った顔がちらほら。その中にはなぜか豪炎寺君や円堂君の顔もあり：

「あーっ！ 沖田まで！」

といきなり尾刈斗戦並みでの音量叫ばれる羽目になってしまった。

耳が：

「さ、先ほどもご紹介がありましたが、沖田総司です。よろしくお願ひします。」

耳の痛みに耐えながらも、何とか自己紹介をする。まともなものにはなったんじゃなかろうか。

「おや、これまた円堂君の知り合いでしたか。安心ですね。席は：豪炎寺君の後ろが空いてますね」

「分かりました」

冬海先生の言葉にそれだけ返すと、俺は豪炎寺の近くに寄つて行つて、小さい声で

「この間はどうも、豪炎寺君」と伝えて自分の席に着く。

何故名前を…と驚いている豪炎寺君を視界に入れつつ、

——こうして、俺の物語は始まつたのであつた。

なんて感じにプロローグを締め切つてみたり：

「沖田さん？聞いていますか？」

「!?ひや、ひやい！」

締め切つてみたり。

帝国が来た！

「着いたぜ！ ここがサッカー部だ！」

そう言つて得意氣になつてゐる円堂君に連れてこられたのは、サッカーチームの部室。

「ええ……」

部室の余りの汚さに、私は声が出なくなる。

汚い……というか汚いで済ませていいレベルじやないでしょコレ！？

私がそんなことを考へてゐるとは全く知らない円堂君と木野さんの二人は、久しぶりのサッカー部員、それも経験者とあつてか、キラキラとした目でこの雷門中サッカー部について説明している。

F_{ットボールフロンティア}は前にも話した通り、男女どちらのプレイヤーも参加が可能なのだが、ここ雷門中のサッカー部は、どうやら復活してから日が浅いらしく、プレイヤーは男子しかおらず、しかも、いまだに八人しか部員が集まつていないとか。

「ふむふむ……なかなか大変なんですねー、ここは。沖田さんはこれまで訳あつていろんな学校を見て回る機会があつたんですけど、ここほどひどい学校は見たことありませんよ」

「な!? お、俺たちだつて分かつてるけど、そんなこと言わないでくれよー！」

「あはは……!!! ゴメンなさいゴメンなさい……！」

二人からの説明を受けて、私が冗談を言つてふざけていると、木野さんから声がかかる。

「もうー！ 一人共！ 皆待つてから、グラウンド行くよ！」

「アツハイ！」

何故か返事が一致してしまつた、私達であつた。

「えー、この度サッカー部に入部させていただきます、沖田総司と申します。ポジションはFWですが、G_{ゴールキーパー}K以外ならどこでもいける自信があります。一応経験者ですので。ということで、よろしくお願ひ

します！」

そんなこんなで少しお怒りな木野さんに連れられてやつてきたのはグラウンド。

人の先導で連れてこられるのは本日二回目ですね……。

そんなどうでもいい感想を抱きながら、私はこれから一緒に切磋琢磨しあう（予定の）サッカー部員に自己紹介をする。

どうやら、『男子部員しかいない』というのは本当のようだ。

また、円堂君達元々のサッカー部員が、何やら久々のグラウンド練習だとということで騒いでいた。

「グラウンドも使えないって……どういう環境だつたんですかね、こ^はこは……」

「ウチのサッカー部は半休眠状態みたいなもんだつたからな、しようがないさ」

私の何気ない独り言^{ボヤキ}に反応してきたのは、青い……というか水色に近い長い髪を後ろでポニーテールにしている、男の娘っぽいイケメンだつた。

「あなたは……？」

「ああ、悪い、自己紹介がまだだつたな」

そういうつて目の前の男の娘はいつたん言葉を区切ると、こちらへ向^き直り、自己紹介をしてきた。

「俺は風丸一郎太。元陸上部でさ、今はD^{ディフェンダー} Fをやってるんだ。よろしく」

「ええ、よろしくお願ひします」

そういつて、私と男の娘——風丸君は、握手を交わす。

そんな感じ（ふわっとした表現）でお互いが挨拶をし終えたころ、このチームのキャプテンである円堂君が、大きな声で私たちの注目を集めた。

「よーし、みんな！ 明日は帝国との練習試合だ！ 帝国に勝つためにも、いっぱい練習して、明日に備えるぞ！」

「「「おう！／はい！」」

「それじゃあ、練習について説明するね。今回は2チームに分かれて

何回か紅白戦をするの。円堂くんがキヤプテンのチームと、壁山君がキヤプテンのチームが良いかな。ポジションや作戦なんかは、キヤプテンを中心のみんなで話し合つて決めてね。準備が出来たら、私に話しかけてね」

これから紅白戦をするということで、初めてサッカーをやる様な人にも分かりやすいように説明をする木野さん。

木野さんの言葉が終わると、皆は一齊に話し始めた。
どうしようか……なんて迷っている私に、円堂君が話しかけて来た。

「沖田、一緒のチームにならないか？　お前のシユートを見ておきた

いんだ！」

「え？　ええ、はい、分かりました……でもいいんですか？　私のシユートを止めたそうに見えますが……」

「うーん……でもさ、そういうのはもつと後、俺もキーパーが上手くなつてからにしたいんだ」

そんな私たちの会話を聞いていた、円堂君をよく知るチームのメンバーは、酷く驚いた様子で叫ぶ。

「「「円堂が勝負を断つた……！　誰だお前????」」

「なつ……！　お前らな……！」

「「「円堂が怒った！　逃げろー！」」

「待てー！！」

怒りで顔を真っ赤にした円堂君が染岡君達を追いかけていると、とても体の大きい、緑色の髪を丸刈り……丸刈り？　にした男の子が話しかけて来た。

「あ、あのー、沖田先輩……」

「ん、はい？　どうしましたか？　壁山君」

「はい、自分のチームに入るんすよね？」

「ええ、よろしくお願ひします」

「は、はいっす！」

そして、チームメンバーを選び終わつたらしい円堂君が、私を含む壁山君のチームに声を掛ける。

「よし、壁山もメンバーを集めめたな！ それじゃあ、サッカーやろうぜ！」

「「「おーっ！！」」

——そして、試合当日。

帝国との試合が行われる雷門中グラウンドは、先程までの雲一つ無い晴れ空から一転して、青空が一枚片も見えない程の分厚い曇雲に覆われていた。

黄色い中に青いラインが入ったシャツの、雷門のユニフォームに身を包み、念入りにストレッチをしている私に、何やら焦つて見える円堂君が話しかけてきた。

「沖田！ 壁山見てないか!? 『トイレに行つて来るツス』つて言つたつきり、戻つて来ないんだ！」

「え……!? 申し訳ありませんが、見てないです……こちらでも一応探しておきますね。……私は体育館の方を見て来ますが、試合も始まりますので、2、3分したら戻りますね」

「ああ、頼んだ！」

そう言うと円堂君は、壁山君を探しに校舎の中に入つていった。

……確かにここは原作だと2階のロッカーの中に詰まつてゐるんじたつけ……円堂君がそつちに向かつていつたみたいなので、私の方は適当に探した振りをして戻りますか……

正門から東方向にある体育館の周辺で軽く時間を潰した私は、グラウンドへと戻つた。
グラウンド横にある、雷門側のベンチでは何故か人だかりができるでいて、私はそれを疑問に思いつつ、壁山君を見つけたのかどうかと聞く。

「みなさーん、壁山君は見つかりましたか？」
「ああ、見つかつたには見つかつたんだが……」
「ん？」

何故か歯切れの悪い半田君の言葉を聞いて、どういうことだろうかと思った私は、人だかりの中心に入つて行き、それを見た。

「だ、誰か……助けて欲しいっす……」

「ええ……
（困惑）」

そこには、壁山君が綺麗に挟まつたせいで抜けなくなり、パンパンになつた口ツカ一があつた。

璧山君……何やつてるんですか……

あー！ 沖田先輩ですか？ 自分 帝国と戦うのか怖くなっちゃって、ロツカーレに逃げ込んでたんすけど、見ての通りはまつちやいまし

「ま
い

ほんとに何やつてるんですか!'

仕方ないですね。」
「…………仕方ないですね。」
「…………仕方ないですね。」

私はそこで言葉を区切ると、壁山君の詰まっている口ツカ一の後ろに立ち、右足を軽く下げる。力を込める。

「それじゃあ折りますね……」

「逝くつてなんすか!?」なんか字が違う気がするんすけど!? それよ

りなんかその間が嫌な予感が……」

入る。

「えつあの沖田先輩？」後ろで何かを蹴ろうとしてるんすか？自分痛いのは嫌なんすけど……いやそのそういうことじやなくて『問答つ

……無用つ！ チエストおおおおおつつつ！！！

「〔〔〔〔〕〕〕」

グダグダと言い訳を続けていた壁山君をロツカーラーから引きずり出す為に、しつかりとためを作つた右足の蹴りをロツカーラーに向かつて直撃させた。

雷門の皆さん、いつの間にか居た帝国のチームメンバーの皆さん^{モーマンタイ}は引いていたようだが、時間が押しているのでこれくらいなら無問題である。

帝国との練習試合が始まる。

本来ならこのような弱小校に、FFで40年間無敗である帝国学園が試合の申し込みをするようなことは無いのだが、今回は豪炎寺君のステータスを計りに雷門にやつて来た、という事情がある。

もちろん、これは選手達には知らされていないことであり、私がこのことを知っているのも、原作知識があるからだ。

大まかな流れだけでも覚えていられるこの頭に感謝しながら、事前に教えていたポジションに着く。

今回の雷門のフォーメーションは4—4—2の『ザ・ベーシック』。このフォーメーションは攻守ともに優れており、使い勝手が良く、他のチームでもよく使用されている物である。

対する帝国のフォーメーションは5—3—2の『デスゾーン』。このフォーメーションは、普通のチームが言えば、主にカウンター狙いといったような使い方をするフォーメーションであるのだが、この帝國の場合は、ディフェンダーだけではなく、チーム全員が攻守ともに全国レベルの技能を持つため、

味方のボールでスタート→帝國フォワードがボールを取る→そこからシユート→ゴール

という悪循環が繰り返され、今まで帝國を相手にしてきたチームはその強みを発揮することが無く、帝國の持つバス（校舎粉碎用）の前に散つてきた。

審判のホイッスルで試合が始まり、私からボールを受け取った、ピンク髪の丸刈りヤンキー——染岡君というのだが——が、帝國サイドへと走り込んで行く。

そこから、雷門の攻撃陣は、練習によつて鍛えられたバスワークを駆使して、攻め上がっていく。

ゴール前、帝國のキーパー——皆（2の方が）大好きな源田——と一対一になつた染岡君が、手の届きにくそうなゴールの角に向かつてシユートをする。

——と見せかけて、私にヒール（踵の事だよ）を使って、バツクパスを回す。

染岡君からのパスを受け取つた私は、ダイレクトで必殺技を打つ体

制に入る。

縮地と呼ばれる歩法を使い、ボールとキー・パーとの距離を詰める。そして、空間を切り裂くかのようにボールに右足で突きのように蹴りを入れると、3つの突きが、同時にボールを襲う。

「我が秘劍の煌めき、受けるが良い！」

『無明三段突き』!!!」

突然の、それもデータに無いような強力な必殺技を繰り出して来た私に、いくら帝国のキー・パーと言えど反応出来るはずもなく、無情にも私の放つた必殺技はゴールへと突き刺さつて行つた。

GOAL!!

帝国——雷門

0—1

「やつた～！ 沖田さん大勝利～！」

「「「……うおおおおおお!!!」」

私が決め台詞いっしょを言うと、一拍遅れてメンバーから、そして試合を見ている観客達から歓声が湧いてくる。

「やつたな！ 沖田！」

私に声を掛ける円堂君も、どことなく嬉しそうだ。

ちらりと帝国の方を見てみると、ノーマークの、それもサッカー部の無かつた学校の選手から、全国レベルの必殺技が出てきて、しかも点を取られたと言う驚きからか、口をぽかんと開けて声の出ない者が大半であつた。

「よおっし！ あの帝国から一点を取れたんだ！ このまま行こうぜ！」

「「「おうつ！ /はい！」」

そして帝国、ボールで試合再開。

帝国のフォワード——寺門じもん——から、キャプテンの鬼道有人きどうゆうとにボールが渡ると、鬼道君が一言呟いた。

「デスゾーン、開始」

——そして、蹂躪が始まつた。

帝国が来た！ 02

——雷門中のグラウンドに、一筋の闇が駆け抜ける。

否、それはただの闇ではなかつた。

帝国が誇る究極の必殺技、『デスゾーン』の持つ力と、その余波である。

それはただの必殺技と言うにはあまりにも凶悪で、そして禍々しい。されどそれは、たつた一つの弱小サッカーチームの、たつた1人のストライカーへ向けて、放たれたものであつた。

それこそが、数奇な運命の元によつてこの『イナズマイレブン』の世界へと産み出された主人公の一人——

——沖田総司であつた。

「……つ、痛つ……」

訳が分からなかつた。

試合がリスタートしたと思つたら、気づいたら私は地に伏せていたのだ。

私が必殺技の『無明三段突き』で帝国からゴールを奪つたあと、試合がリスタートするため、自陣へと戻る時。

すれ違ひざまに、鬼道くんが何かを呟いたのは聞こえていた。

しかし、既にこの後の試合の展開のことで頭の中がいっぱいになつていた私は、彼が何を言つっていたのを聞き逃してしまつたのだ。

——いや、これもまた、言い訳のひとつだつたのかもしれない。

私の身に何が起きたのか、鬼道くんが何を呟いていたのかなんて、原作イナズマイレブンが好きな人なら、一瞬で分かるはずなのに。

——『デスゾーン』

初代ゲームではTP55を消費し、予め決めておいた2人のパートナーと共に放つ、林属性の3人技。

そのシユートを覚えるキャラクター自体はあまり多くないのだが、その分シユートの威力も非常に高いものとなっている。

生前の私はあまりゲームでの対戦をしなかつた為、その必殺技を覚えている選手を良く愛用したのだが……。

「——まさかその威力を、私自身で体験するとか、普通思わないじゃないですか……」

周りの皆さんに聞こえないように、そつと呟く。

帝国の桁外れな威力の必殺シユートを目の当たりにした、雷門中の観客やサッカー部のマネージャー、そしてグラウンド上の選手達は、まるでお通夜のように静かになつていて、たつた一つの物音でも大きく響く。

フン、こんなものか——そんな表情で鬼道くんは鼻を鳴らすと、デスゾーンを打つた^{寺門・佐久間・洞面}3人を引き連れて、雷門ゴールに背を向けていく。

その足音にハツとなつたチームメイト達が、一気に私の所へと駆け寄つてくる。

「大丈夫か、沖田!？」

そう悲痛な声で叫ぶ風丸君に対し、『大丈夫ですよ』なんて笑いかけてやろうなんて思うが、そもそも思うように立ち上がれない。

そう、先程のシユートによつて私は、帝国にとつて脅威のある選手だと判定されたのか、豪炎寺君のようにただ力量を図るのではなく、その必殺技をもつて私を『潰しに』かかつたのであつた。

さつきだつてそうだ——『デスゾーン』を、右足に向けて直で打つなんて。

雷門は4—4—2のフォーメーションを使う——しつと加入

していった目金君はベンチスタートである——のだが、試合前に私と円堂君、そして情報収集をしてくれていた木野さんの3人で打ち合わせをしていて、そこである作戦を決めていたのだ。

『帝国にボールが回るか、帝国ボールからスタートする時は、沖田がフィールドの中央へと立ち、相手の攻撃をある程度抑制する』

というものだつた。

もちろんこんな作戦、お粗末な付け焼き刃にも程があるのかもしれない。

しかしそれでも、たとえ天下の帝国が相手であつたとしても、数分は持ちこたえることが出来たのではないだろうか。

そんな希望を胸に抱いていた。

……それが現実はどうだ？

サーヴィアントと同じ肉体などというチートにうつつを抜かし、FFFを40年間も優勝し続けているチームに対し『私がある程度相手の攻撃を抑えます』だつて？

情けなさすぎて、もはや涙を通り越して笑いが溢れてくる。

『さつさと点を取り返しちゃいましょう』

そんな言葉すらも、痛みに歯を食いしばる今の自分は、かけられな
い。

「……君、プレイはできるかい？」

この試合を仕切っている審判が、不安そうな表情でこちらを見てい
る。フィールドの奥には既に担架が運び込まれていて、いつでも私を連れ出そうとしている。

だが、私はそれを是としない。

私だつて、曲がりなりにも転生者なんだ。

帝国がなんだ、デスゾーンがなんだ!!!

「こんな程度でっ……！ 負けてつ、たまるか……ッ！」

痛みで目尻に涙が浮かぶのを無視して、私は何とか立ち上がる。そ
の立ち姿はまるで幽霊のようにゆらゆらと揺蕩つっていて、とても元気
があるようには見えないのだろう。

——あ、これ足折れるかもですね。
どこか冷静な自分私が、そう語り掛けてくる。

……うるさい。そんなのとつぐに分かつてある。
そう切つて捨てる、自分私もいる。

『止めておけ』

そう囁く声は無視して、無理やり体をセンターサークルへと移動させる。

たとえ足が折れたって、千切れたって!!

——この世界に転う生まれたからには、こんなところで負ける訳には行かないんだッ!!!

審判から気合いで試合続行の許可をもぎ取り、試合が再開する。
センターサークルに置いてあるボールを、染岡君に軽く押してもらい、右足のインサイドで受け取ろうとする。

「——ッ!」

がその瞬間、右足から響く壮絶な痛みに思わずボールを取りこぼし、その場に蹲つてしまう。

「——なッ!?　おい沖田、お前——！」

取りこぼしたボールは、驚く染岡くんの足元をすり抜け、帝国選手の元へ。

そして、その選手はその場で足を振り上げる。

コートの半分を示すハーフラインよりも奥であると言うのに。
彼は振り上げた足を、もはや残像すらも残らないレベルで蹴り抜く。

その動きにきちんとボールは応え、蹴った選手の、そのイメージ通りの動きをするのだろう。

——そう、私を巻き込むようにして、ゴールへと向かうのだ。

「——ガツ——!?

その挙動は、現実では有り得なかつただろう。

90度に近しい角度を描くショートなど、海外のどこを探しても見つからないに違いない。

だ。だが、ここはアニメの世界、それも超次元サッカーのある世界なのだ。

この程度のシユートを、中学生が打つたつておかしくない。しかし私は、すつかりとそのことを失念してしまっていた。

そして――。

「……？」

呆然とする円堂君のすぐ横を、ボールに腹部を押され続いている私が通過してゆき、そのままゴールへと叩き込まれたのであつた。

——それから……。

「うわああああああああ?!?」

相手のブロツク技『キラースライド』を受けた栗松くんが、足首を負傷しその場に倒れ込み。

「つ——ガハツ!?」

どうみたってファール（反則）なドリブル技の『ジャッジスルー』を受けた風丸くんは、呼吸困難に陥りながらフィールドの奥へと吹き飛ばされる。

雷門の選手が様々な手法でいたぶられる中、特に大きな被害を受けたのは、やはりと言うべきか私ともう一人、円堂君であつた。

私が特にダメージを受けている理由は先程語った通りだが、円堂君までもが被害を受けている理由、それは――。

「まだ、まだアイツは来ないのか――!?」
それは、帝国がこの弱小中である雷門中へとやつてきた主な理由であつた。

ある理由でサツカーラーから離れた、『炎のストライカー』と呼ばれる

『豪炎寺修也』君。

そんな彼が、実家から近いこの学校へと転校してきたのだが、帝国の狙いはそこにあつたのだ。

彼らは——と言うより、その総帥(?)である『影山零治』は、豪炎寺君を帝國学園のサッカー部へと引き込む事で、日本の少年サッカー界における更なる地位の獲得を、また、さらにサッカーを帝国一強へ仕上げることを目指そうとしていたのだ。

その為彼らは、私たちに直ぐにとどめを刺すのではなく、少しづつ、じわじわ、じわじわと心を痛めつけ続け、豪炎寺君が参加してくることを狙っているのだ。

しかし、彼らのそんな思惑に反し、前半は終わりを迎える。

現在スコアは20—1だ。

早くからあの猛攻を受けていた割には、思つたよりも得点を取られていないようにも見える。

だが、それはスコアボードの上での話だ。

雷門中サッカー部の間に流れているムードは、非常に険悪なものとなつていた。

「どうなつてんだ、あいつら。誰一人として息が乱れてないぜ」「そりやそうさ。奴ら、全然走つてないからね」

ボヤく染岡君に、助つ人として入部したマックス君が同意する。その奥で私は倒れしており、そんな声に反応すらできない。

デスゾーンを受けるなど酷使した右足は、酷く発熱していて、もう動かさなくたつて痛みを発する域に突入してしまっている。

またそれは他の部分もそうで、お腹も、肩も、首も指先も。どこか1箇所を動かそうとすると、その部位、いや全身から痛みが生じてくる。

これまで動くことが出来たのは、もはや奇跡としか言いようがないのかもしれない。

マネージャーの木野さんは、心配そうに私を見るが、それは他の部員たちも同様なようで、どうしたらいか分からないとオロオロしている。

一応、一応サッカー部の顧問である冬海先生は、いつの間に居なく

なつたのか、ベンチからは姿が消えていた。

ハーフタイム時にはもう居なくなっていたので、私がボコボコにされ始めた時には既にいなかつたのかもしれない、ちくせう。

「なんだなんだ！ 勝利の女神がどちらに微笑むかなんて最後までやつてみなくちゃ分からぬだろ！ そりだろ！ なあ？ 皆！」

暗い顔をしているチームに対し、そんな言葉で励まそうとする円堂君だったが、それすらも今の彼らにとつては逆効果。

私に至つては、何かを言うどころか体を動かす体力すら残つていないと言うのに。

「後半を開始します。集まつてください」

そこに無情にも響く、審判の声。

私はその声に反応し、ノロノロと緩慢にコートへ向かつて歩き出す。

が、誰かに肩を掴まれ、その歩みは止められる。

——染岡君だ。

「……お前、それで試合を続けるつもりなのか？」

彼の目線は私の右足へと向けられている。

やつぱり、近くにいた彼には、お見通しみたいだ。

「つ、だ、大丈夫ですよ。私を誰だと思つてるんですか？ ハイパー・テキなストライカー、沖田さんですよ？」

「お前！ その足で大丈夫なわけないだろうが、ああ!?」

ふにやりと力無く笑いながら彼に言うも、逆に激高され大声で怒鳴られる。

が。

「……でも、ここで私が引いたら、もつと点を取られる。……違いますか？」

「……チツ」

一瞬彼は、ずっとベンチを温めていた日金君へと目を向けるが、直ぐに私へと向き直ると。

「……もう無茶な真似、すんなよ」

そう言い残して、スタスタと歩き去つていった。

「……ふふつ。心配してくれてるんですね」

——今はその気遣いが、無性に有難かつた。

後半開始のホイツスルが鳴り響く。

後半は帝国ボールのスタートの為、直ぐに帝国陣内では、華麗で洗練されたバス回しが始まる。

前半は手を抜いていたのか、その速度と力強さは、前半のものとはまるで別物だ。

当然、前半で疲弊した私たちには手が出せるようなものではなく。「グツ……!!」「ガアアツ……!!」「ぎやああっす!!」

まるで前半の焼き直しの様に、雷門メンバーは痛めつけられてゆく。

よりいつそう苛烈に、よりいつそう残酷に。

そしてキレを増したシユート紛いのバスは、当然私にも飛んでくるわけであつて。

「つ、きやあああああっ!!」

しつこく、しかも的確に私の患部を狙い撃つそのボールが、四方八方から飛んでくる。

たまにどこか別の誰かを撃ち抜いていると思つたら、すぐには私の所へ戻ってきて、再びこの虐めのような時間が再開する。

「——続ける。奴を炙り出すまで——!!」

その瞬間、佐久間君、寺門君、洞面君の3人が、鬼道君の前へと走り込む。

——まさか。

忘れもしない、その光景に、全身が凍り付く。

ほとんど反射的にゴールへと駆け出す。

ゴールには、私よりは疲弊していないものの、それでも十分ボロボロの円堂君が。

——このままじや、マズイっ!!

そう直感した私は、彼らのシユートが来るであろう射線上へと立ち

塞がる。

『デスゾーン』っ!!

その一瞬の隙を縫つて完成させられた究極のシュートは、周りの地面を巻き込み、荒れ果てさせるほどの力を持つて襲い来る。

私はそのシュートに対し、半ばヤケになりながらも、利き足である右足を無理やり叩きつける。

「ああああ、ああああ、ああああ、あ、あ、あ、ああああ、あ、あ、あ、ああああ!!!!」

このままでは、彼はこのシュートを止められない、そう思つてしまつたから。

ゴツドハンドが使えるのなら良い。

でも、彼がゴツドハンドを初めて成功させたのは、豪炎寺君加入後に飛んできたノーマルシュートに対してだつたはずだ。

こんな凶悪なシュートを、生身で。それも足だけで受け止めるなんて、イカロスが太陽を目指すようなことだなんて、わかっているのに――。

「ん、な、と、でえつ――」

右足から、ブチブチと嫌な音が鳴り響く。

もはや全身の痛みは、感覚とともに等に消え失せていた。

地面に突き立てられ、体を支える左足は、ズルズルと少しづつ後退していく。

外野からは悲鳴。きっと私の足が、かなり悲惨なものになつているんでしょうか。

でも。

たとえどれだけ私が傲慢だつたとしても。

「――負け、たくうつ…な、いつ!!!」

この思いが、帝国の面々に負うことなんてないんだと、そう信じているから――!

とうとう体がシュートの力に負け、ゴールへ向かって吹き飛ばされる。

だが、それでも消してボールからは足を離さない。少しでも力を与え続け、デスゾーンをなんとかして弱めるのだ。

が、踏ん張った状態でも体が投げ出されるようなシュートを、空中の無茶な姿勢で止められるわけがなく。無常にも、私のすぐ後ろにはゴールネットが迫っていた。

「——沖田っ!!!」

私の凄絶^{せいぜつ}な姿に棒立ちだつた円堂君のすぐ横を、私^{（）}とゴールへと叩きつけようとするボール。

——させるものか。

ほとんど無意識に、私はその行動を選択していた。

背中はゴールのクロスバーへ、ほとんど使い物にならない右足は、ボールを逸らすために右側のクロスバーへ。

ぬきやりと、ゴールポストか私の骨か、どちらともつかないような音がした。

「——っ!!!」

それでも、絶対にこのボールは止めるんだ。なんとしてでも、止めるっ!!!

そんな私の思いが通じたのか、デスゾーンだつたシュートは、ほんの少しだけその力を弱めながら、私の右足の上を滑っていく。

ボールはゴールを超え、試合を観戦していた外野へと突き進む。ボールという押さえがなくなつた私は、それこそボロ雑巾のようになりながら、グラウンドへと墜ちてゆく。

最後に私が、意識が無くなる前に見た光景。

それは、とつぐに逃げ出していた目金君の後ろ姿と、涼しい顔でのボールをトラップする、豪炎寺君の姿だつた——。

「…………あれ？」

知らない天井です。

思わずそう呟こうとして、体に残るとてつもない痛みに、噎せ返ってしまう。

それでもどうにかして腕を使つて起き上がると、なんとかナースコールを押す。

飛ぶようにしてやつてきた医師に話を聞くと、どうやら私はあの帝國戦で、デスゾーンを受け止めたあとに眠るように意識を失つてしまつたらしい、です。

そしてまた、三ヶ月の間、サッカーのような運動ができないことも告げられた。

「——正直、これは奇跡に近いよ」

医師は私に、レントゲンの写真を見せながら語つた。

「右のレントゲン写真、これね、君が搬送された直後のやつ。……で左ね。こつちが、入院一週間目のさつき撮つたやつ。わかる？ これね、もう既にちょっとずつ治癒が始まつてるの。これだけならわかるんだけど、君はその速度が異常に早いんだよ。これはもはや、特異体质とかそんなんで片付けられるレベルじゃないから。……それで君は——」

ぐどぐどと話す医師の言葉を、何処かふわふわ夢見心地で聞いている。

さすがサーヴァントの体、回復速度も違う、なんて考えられるくらいには、余裕があつたのかもしれない。

——でも、正直この現実は、まだしばらく受け入れられそうになかつた。

ガラリ。

「……沖田？ 起きてたのか!?」

扉を開いて入ってきたのは、キャプテンの円堂君と、マネージャー

の木野さん。

こちらを見る目は驚きにあふれている。

「…なんですか。私が死んだとしても思つてたんですか？」

「い、いや、そういうわけじゃないんだけどさ。あんなぼろぼろで、声かけても全然起きなかつたからさ」

まあそれはそれとして。

「試合…勝つたんですか？」

今一番聞きたかったことを、直球勝負で円堂君にぶつける。

「――勝つたよ。豪炎寺が入つてくれてさ、すつげーシユートを決めてくれたんだ！…それに、沖田のおかげで、あのあと点を取られずに済んだんだぜ？」

「…良かつた」

「？沖田、泣いて…？」

「――良かつ、たあ…！」

私がしたことは間違いではなかつたんだ、無駄じやなかつたんだとわかつて、安堵からか、目からは涙が溢れ落ちてくる。

「うううううう…！」

ベッドの上で、私は体を丸めて泣き続ける。

暖かな瞳で見つめる円堂君とのこの時間が、今は何よりも心地よかつた。

「――あ、そうだ沖田」

「なんですか？」

円堂君が病室を出ていく直前。

こちらに顔を向けて聞いてくる。

「容態はどうなんだ？大丈夫そうか？」

「…本人にそういうの聞きます？」

「あ、あはは…」

「大丈夫みたいですよ。あと三ヶ月で治りそうです」

???????

(X
フ
ア
イ
ル
の
b
g
m
_